

キルギス共和国出身の商学研究科研究留学生 チヨンムルノフ・チムールさん 日本の中小企業を研究

中央アジアのキルギス共和国出身のチヨンムルノフ・チムールさんが、4月から本学で学んでいる。商学研究科の研究留学生として、研究テーマは日本の中小企業についてだ(指導・黒瀬直宏教授)。チムールさんに話を聞いた。



中国との国境に連なるティエンシヤン山脈とパミール高原の裾野に国土が広がるキルギス共和国は91年、旧ソ連から独立を宣言。産業は農、牧畜、鉱、軽工業などで現在、市場経済化に向けての改革が着々と進んでいる。

「キルギス経済の今後を、日本の中小企業の現状を学ぶことにより展望していこうと思いました」とチムールさんは、留学の目的をしっかりとした日本語で話す。

親日感情の強い同国では、日本語を勉強する人が多い。チムールさんは少年時代、空手と出会い、武道を通じて日本に興味を持ったそうだ。ピシケク人文大学、キルギス民族大学大学院に学び、日本語は約5年間勉強。母校の大学で日本語教師もしていた。

ゆったりとした高原の国から環境のまったく異なる日本での生活。「来日は2度目(97年に1年間静岡に滞在)で、日本の歴史や文化も学んできましたから大きなカルチャーショックはありません」と話す。授業中、熱心に講義に臨む学生が多い反面、一部の学生の授業態度の悪さにびっくりしたこともあった。「先生を敬う気持ちを忘れてはいけませんね」。

中小企業が専門の黒瀬教授は、キルギスでの日本語教師時代に日本人の同僚から紹介があった。「実践論も豊かな先生のもとで知識を深め、将来は専大の大学院に進学をしたいです」。一語一語をかみしめながら、終始穏やかな表情で応じてくれた。

[5月15日/ニュース専修13面]

02年度春期留学プログラム体験記

国際交流協定校など海外7校で実施された「02年度春期留学プログラム」の参加者(102人)の中から、2人に体験記を寄せてもらった。

実地で使って身についた中国語 ☆上海大学 田村貴洋(経済2)



▲周荘にて(中列右端が田村くん)

初めての海外だったので、すべてが驚きの連続でした。日本と中国はすぐ隣同士なのに、街の風景や人びとの考え方が全くと言っていいほど違います。これほど違うとは想像していませんでした。

留学前、上海は日本のお台場と横浜を混ぜた感じと聞いていましたが、まさにそのとおりで、街の発展の様子に驚き、上海の夜景に感動しました。

授業は少し難しかったですが、先輩や友だちに助けられました。上海大学で日本語を勉強している学生との交流会で出会った友だちと、ほとんど毎日一緒に過ごしたことで中国語を話す機会が増えました。習ったことを実際に会話で使う方法ですぐに覚えることが出来ました。彼らとは、今でもEメールや手紙で連絡を取っています。

留学を通して中国語だけでなく、さまざまなことを学び、日本人・中国人の友だちもたくさん作ることが出来ました。5週間という短い留学の中で、ここまで多くのことを得るとは思っていなかったので、次は来年の春、北京に留学したいと思っています。

様々な国籍の人々と触れ合う ☆サスケエハナ大学 柳沢陽子(経済3)



▲大学に近いパブで、自家製ビールについて聞く柳沢さん(左)

このプログラムは、私にとって大きな意味を持ちました。6週間という長く思える時間はまるで6日間のように短く感じました。出発前にはホストや現地の人たちと何を話して、どう接すればよいか不安でしたが、実際に一緒に過ごすことで自然とその答えは見えてきました。

午前中の日本人だけの授業はディベートを中心としたもので、今までフォーカスを当てて話し合ったことのないピックについても、みんなと意見を交わすことが出来ました。午後

の授業は生のアメリカの大学を体感出来、現地の学生の授業に対する真剣さや、積極性に刺激を受けました。先生方のおかげで多くの人にインタビューしたりする機会にも恵まれました。さまざまな年齢、宗教、国籍の人々と触れ合えたことは私の大きな財産となりました。自分の興味ある分野、やりたいことを先生に話せば、それにこたえていろんな文献を提示してくれます。その分、自分の語彙を増やすなど、努力が求められるところでもありました。

毎日が発見と感動の連続で、この貴重な体験をさせていただいたすべての人々に心から感謝しています。

[5月15日/ニュース専修13面]